

07 10 26

「アジア物理学会について」の背景

標記の報告をButsuriに投稿した頃(1982)、ACTP(Asian Centre of Theoretical Physics)を造らうといふ相談が、アジア各国の物理学者の間に持たれる様になって来た。(主に)アジア地区で国際会議が開かれる度にinformalな話し会ひが進展し、やがては ACTP 設立へ向けての準備をする為(ボランティアの) committee が出来た。Yはその chair に押された。

云ふ迄もなく、ACTP は ICTP—Trieste*の東アジア版である。この準備委員会の東南アジアの面々は皆 ICTP に(短期乃至長期に)滞在した連中である。Yより>10才程若い理論物理学者たち、ICTP に同じ時期に滞在し理論物理に励んだ者達の間には、(旧日本海軍——陸軍だったかな——の)「同期の櫻」のような連帯感に満ちた友情があった。そしてYは日本で多くの International Conference / Syposium(更に Singapore の ICHEC - 1990)の organizers をして來たし、C11 の secretary、次いで IUPAC の Executive Council Member、・・・President、・・・となってゐて、国際的知名度を買はれての chair への祭り上げであつたらう。

近隣諸国の物理学者の日本への(特にその leadership に)期待が高いのに、日本の(Yより)若い物理学者、それも物理の出来る者達の多くは、アジア近隣諸国との collaboration や seminar や school への出向(出講)に比較的冷淡であった(とYは痛感した)。彼等は云ふ:「今は一生懸命に物理の仕事をする時期だ。米欧(先進国)へ短期であれ長期であれ出掛けるのは自分達の物理に有効だが、(近隣の)発展途上国へ行くのは時間の損失(ロス)だ。そんなのは当分勘弁してほしい。」かう云はれゝば、それを押し返して、近くのアジア国へ行けとは云へなくなつて了ふ。アジアとの collaboration なんて、(年をとつて、物理をやらなくなつた) senior physicists の手頃な job だと云はんばかりであった。

Yは、心中大いに憤った。かうした心境の下に書いたのが
アジア物理学会について

Butsuri 37-4 (1982) 326-335

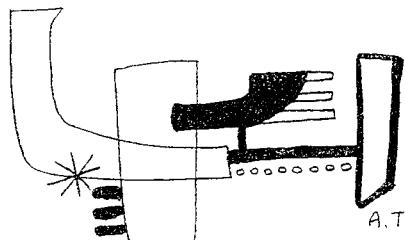
の§1である。この文を書いたのには、今一つ大きな理由がある。Yの先輩たちの、international issues への対応が余りにも鈍重で遅拙なことへのや

るせなさであった。

東大・物出身の秀才達は、上に引用した考への持主が多かった。しかし、Yはこの風潮に反対であった。これら秀才共の多くは米欧の（物理の）流行を追ふのに熱心で、さうでないと落ち着いて仕事が出来ないらしい。しかし流行を追ってやった仕事は所詮二番煎じである。よい仕事の出来る chance は少いし、「物理の（その分野の）教科書」に載るようなるもあるまい。偶には文化的（物理学の）僻地へ行って、自分の仕事（物理）のあり様をじっくり反省し、ゼロから出直すのも悪くはなからう（否、時々さうすることが大切だと思ふ）。それに大木の下に大木は育たないのである。** 热帯雨林は喬木に充ち満ちてゐる。新たに大木が育つ機会はない。落雷で喬木が倒れ、空地が出来ると、そこに新たに若木が伸びて、喬木となる。又新たな大木は、巨木（の集団）から離れた所にこそ、育ってゆけるものであらう。それが新天地の開拓である。

脚注

- * International Centre of Theoretical Physics(Trieste, Italy)
の略称。A・Salam、列伝抄参照のこと
 - ** 列伝抄、A・Salam 参照
-



アジア物理学会について

山 口 喜 夫

最近、南アジアの人たちが「アジア物理学会」¹⁾を組織した。我々日本の物理学者がこれにどう対応すべきであろうか？恐らく百人百様の考え方や方策が出てくることであろう。しかし日本物理学会としてはたった一つの対策しか採れないにきまっている。そういう大切な決定を下すための準備を兼ねて、近隣の地域²⁾の物理学者たちと我々との関係につき日頃考えていることを記して、積極的・建設的な論議の一助としたい。次いで、このアジア物理学会についての歴史的経過およびそのさい Singapore の物理学者から提案されている International Topical Conference についても述べる(日本側と設立者側のこと)。最後に、我々がどうすべきかを論じたい。なお、本文中の略語については表を掲げておくので参考されたい。

I. 我々のとるべき態度にかんしての私見

我々が近隣の地域の物理学者たちと交流した場合、短期的にみて、我国の物理学に大きな利益があるとは期待できないとよくいわれる。しかし、果してそう断定してよいであろうか。シーボルトが日本へきて、日本の弟子たちの物凄い熱意に驚いたためしもあるではないか。³⁾ しかも近隣ないしアジアの諸地域との古くからの文化的・貿易上の交流、今後の日本にとってこれら地域と良好な関係を維持することの重要性、更には発展途上国と呼ばれる地域の科学および技術上の今後の躍進、等、を慎重に考慮した場合、日本は、一日も早くこれら地域の物理学者との交流を密にし、彼らが物理学を(更には広く科学を)発展させるのを側面から支援することが必要だと信ずる。これは、我国とこれら近隣諸地域との関係を長期的に見据えてのことなのである。彼らが、こういうことを我国に期待する眼差しを、日本に向けているうちに、日本が行動すべきである。彼らが完全に一人立ちし、日本と対等に国際交流の実をあげ得る日まで待つのでは、遅きに失しよう。

勿論、筆者はよく知っている：日本のかなりの数の物理学者が、国際交流といえば欧米とだけ行うものだ

と思い、アジアや太平洋州の地域との交流に見向きもしないことを。また、これら近隣地域の若者たちが、とくにエリートたちが旧宗主国ないし欧米に留学し、次の水準の者たちが仕方なく手近な日本へ来るという、抜き難い風潮のあることも……。しかし、この後者の現実は、日本にきた白人留学生と東洋人留学生との間の公私にわたる有形・無形の処遇の違いのもたらしたことではなかったか——少なくともニワトリとタマゴの関係にある点を見るのがすことは出来ない。

しかし、最近における欧米での基礎科学への投資の逼迫、日本の工業力の躍進、更には日本での基礎科学のいくつかの分野における研究施設の(対欧米での相対的な)整備の進行*、等、により、近隣諸地域(およびこれらの地域出身)の専門家たちが日本を見る眼が違ってきた。これらの人たちは、日本とのまともな研究上の国際交流を期待し始めたのである。これは真剣に受止めなければならない。

蘭学以来、また特に明治以降、我国は我国の科学を

* 筆者に身近なごく少数の具体例をあげると、宇宙科学研究所の科学衛星、野辺山の口径 45 m の大型宇宙電波望遠鏡、高エネルギー物理学研究所のブースター利用施設・放射光実験施設・トリスタン、核物理研究センターの雷電、等々。物性物理や応用物理の人たちなら、別の適当な例を思い浮べることであろう。

育成・発展させる為に、欧米先進国より多くの支援を得て来た。そして湯川・朝永を生み出すまでの生長をとげた。古風にいいうなら、この恩は返さなければならない。それは欧米に対してか？ いや、それでは大して意味をなさない。その恩は、物理を更には科学を発展させようとして努力中の近隣諸地域へ返してこそ、よりよく生きてくるというものである。

恩がえしにあたっても、*economic animal!* の札束より、眞の科学者としての有効な刺激をもたらすような交流をこそ期待したい。アメリカで無名に終ったにもせよ、札幌農学校(北大の前身)におけるクラークの短期間の滞日がなしとげたような例こそ、以て範とすべきなのである。

メソポタミアに古代文明が出現して以来,⁴⁾ 5000年に渡って、聖人・君子といわれた人々の百万言を以てしても「平和なヒトの社会」はおとずれてこなかった。この歴史の重みは並々のことではない。我々は物理学者の途を選んだ。そして政治家や人文学者を選ばなかった。物理学者をやめて、本氣で転向し、理想とすることに専心活動するのは結構なことである。事実、筆者の外国の知人で、物理学者からエネルギーの専門家や牧師に完全転業した者もいる。しかし中途半端な二足の草鞋を履くのは筆者の信条から嫌いだし、少なくとも有能な中堅の諸君がそうなったら露骨に眉を顰めてくれよう。⁵⁾ 二つの事を同時に共にまとめて実行できる人はそうやたらには居ないものであるから。

本業の物理学の研究・教育と両立させつつ、国際的な相互理解を深めるには、物理学上の交流が最も適切なものであろう。ヒトは物理だけで生きるものではないから、物理学上の交流が諸地域の人々との相互理解をひろげ、ひいては、ささやかなことも、ヒト社会の平和共存の礎の一つとなろう。如何にも迂遠に聞こえよう。しかしヒトの文明5000年の経験に照らして、このようなささやかだが、たゆまざる努力を、多くの学問・芸術・スポーツなどの諸分野で積み重ねて行くことが、大袈裟だが、世界の平和実現への必要なステップであると信じている。⁶⁾ 恰好のよいスタンド・プレイで済む事ではない。

余談だが、筆者は、全世界の諸地域が均一な「工業社会乃至テクノクラートの支配する社会」になるなんて事に怖気だつ。各地域が、その独自の文化的香りを保持しつつ、自然科学や芸術などのいくつかの分野で

特色を發揮することを期待する。こういう点からも、地域毎にきめ細かで有意義な学問上の交流が進展することを願う。

理論物理学は、屢々紙とペンだけですむ *cheap physics* といわれ、後進国に於いては物理学の中で先行しがちである。筆者も理論とくに素粒子・原子核理論を専攻する者の端くれであり、従って近隣諸国の高エネルギー関係者と特に縁が深い。だからといって、これらの地域との物理学上の交流を行うに当って、素粒子・原子核の分野に重点をおくべしとは考えていない。⁷⁾ いう迄もない事とは思うが、念の為特に断つておく。この諸地域にいる物理学学者や物理学志望の若者たちの人口構成を勘案した適切な対応が望ましいにきまっている。

II. アジア物理学会やその他の動きと日本側の対応——その略史⁸⁾

§ 1. 事の起り

ICSU の小委員会 COSTED の Scientific Secretary, S. Radhakrishna から、伏見日本学術会議会長あての、1979年2月12日付の手紙を日本学術会議(以下 JSC と

略語表

APPS	Asian-Pacific Physical Society (Phua-Yang)
APSO	Asian Physical Society
COSTED	Committee on Science and Technology in Developing Countries
EC	Executive Committee (APSO 初代の執行委員会)
EPS	European Physical Society
ICSU	International Council of Scientific Unions
ICTP	International Centre for Theoretical Physics
IUPAP	International Union of Pure and Applied Physics
JPS	Physical Society of Japan (日本物理学会)
JSC	Science Council of Japan (日本学術会議)
JSPS	Japan Society for Promotion of Science (日本学術振興会)
物研連	物理学研究連絡委員会
核研連	原子核研究連絡委員会